小生ごとの卑夫も襁袍のうちより文化の餘沢に飽足りぬるものから各家に誦し毎人に議論おせざさを見りし等もせしまで吾ふものよしとも何しともいはずて一束に刈うめぬ。おせて小生と記識されはれば其人其書暗記せられたぐらにしるは。これをたるまですべてこれを古老の説とはされど心を正し身を修め家國をも斉へ治むるの治教化育の経緯の道なんどは今君子其位に充満せのへば。これいやしどの僭らふべきことかは。そもそもわのがむきのやしかばは曝背をはらるまでなり

皇國文學乃紀原

我皇國に文学の道乃始りしるは。上古胎中皇帝の朝に韓土の僕生河直岐王仁等。来朝して僕書種々獻りけるに。大鷦鷯尊菟道稚郎子の両皇子の。殊にあれを愛兄たまひて。文学びまひしぞ始めなりける。此大鷦鷯尊を申上るは。即ち仁徳聖帝のあるなり。此聖帝御兄弟の。吾浪速の國にて。此の学の道を肇めらめひしより。今日にありては。皇國の文化乃治沢は。四海にみち溢れて韓土にものらは。諸越よりも。邈乎勝れたるまでなりにける。さらば仁徳聖帝御兄弟は。我大日本文学の鼻祖にして。